

道徳の時間（中学校） 偉人の生き方に学ぶ ～天命に生きる・北里柴三郎～

本 田 実

1. はじめに

2013年、2015年の『星稜論苑』誌上で、道徳の授業における教材、資料あるいは道徳授業者として求められる教師の姿勢などについて述べてきた。偉人を教材とし、偉人の生き方を通して子どもたちが憧れるものを持つ機会を作る。それが将来に向けて力強く生きる原動力になるということが期待される。また、偉人の生き方の中には必ず人としての正しい歩みがある。同じ人間であるから、決して順風満帆の人生を歩んでいるわけではない。中学生の年代では共通した精神的な成長過程を経ているし、短所もあれば挫折もある。そのような「挫折」や「短所」に焦点を当て、そこを起点とした「人間力」に注目した授業を計画・実施することで、生徒に人間としての生き方をより深く見つめさせることが偉人を扱う理由であり、目的である。

2013年には中学1年生・2年生を対象に『偉人の生き方に学ぶ～西郷隆盛の生き方を巡って・人生のモデルを見つける試み～』と題し、立場や肩書に左右されない言行一致の人間像をテーマとした授業を行った。また2014年には『偉人の生き方に学ぶ～中江藤樹・「孝」の心を巡って』の題の通り、「孝の心」をテーマとした授業を行った。（『星稜論苑』には2015年に掲載）中学生の年代は、独自の自律性や独自性を見つけ、理想を描き、生きる意味を考え、生き方を選択し、志を立てる入り口にいる。中江藤樹の授業は、2013年の反省から、そのような人間の精神的成長を一層考慮して行なった。

今回は以前から提唱している「偉人の生き方に学ぶ」「複数時間による道徳の授業」の効果を上げるために、過去の方法と別の形式を取り入れるなどの試みを行なった。その実践結果を過去の授業に重ね合わせ、より良い授業に必要なものを探り考察した。

2. 『天命に生きる・北里柴三郎』の試みとして

① 複数時間による道徳の授業実践

基本的に道徳の時間は1テーマ1時間で行なう。そのために教師はさまざまな構成を考える。

全体を通観しながら、導入・展開・まとめをどのような構成にするかは大切な意味を持つ。例えば導入にしても何通りかの入り方を考えることも必要になる。どこにテーマを置いてまとめるかによって導入は大切な意味をもつ。そのために、まず1時間で達成可能

な具体的なねらいを立てなければならない。

また、『学習指導要領解説 特別の教科道徳編』にもあるように、『道徳科で学んだ道徳的価値に対する理解を、日常生活の中で』活かしていくことがなければ、道徳を学ぶ意味はない。その点から、「まとめ」を重視し、工夫を試みる必要がある。心ある教師は1テーマ1時間の授業を成立させるために、さまざまな視点から研究・工夫を重ねている。

逆に、1テーマ1時間で成立させるには工夫が未熟であったり、どうしても内容を深めるには時間が足りないと考える教師もいるであろう。道徳の授業を1時間で終わらねばならないというわけではないが、構成がしっかりしていないと、中途半端な時間の使い方になる恐れがある。

そういう場合は初めから2時間3時間構成にした方が、内容的に充実したものになることは明らかである。現在使用されている教材はそのようにも使うことができる。

② 過去の複数時間による道徳の授業からの提唱1

以前から提唱している「偉人の生き方に学ぶ」道徳の時間は、複数時間を使いじっくりと取り組んできた。

その理由の一つとして、生徒たちは歴史上の人物を意外と知らないことが挙げられる。中学1,2年生は、よほど世に知られた人物か、歴史など他教科で学んだ中に出てきた人物であることが多い。当然その数は限られる。しかも名前は聞いたことはあるが、どういう功績があったかはもちろん、どの時代に活躍したかすらあいまいであることも否定できない。以前に扱った西郷隆盛については名前は知っている程度であった。中江藤樹については知っている者は皆無であった。しかし日本人である以上、我が国においてのみならず、世界にも大きな功績を残していながら知られていないというのは、ある意味異常なことである。

ここでは歴史教育を論じる場ではないのでその点については触れないが、自分たちが生まれ育っている国に、自分たちが今後生きていく上で目標や憧れになる人物が多くいることを知り、生き方のモデルとなることで、先人への尊敬と我が国に対する誇りも生まれる効果があることは断言できる。

そういう意味からも複数時間をかけて、偉人の生き方から、その人物が何を願い、何を考え、どのような生き方をしたのかを、じっくりと深めていくことに道徳的意味がある。

③ 過去の複数時間による道徳の授業からの提唱2

選択した人物について総合学習の時間と道徳の時間を連結させて行うことで効果を上げることができる。前もって人物の輪郭がより明確になるように、生い立ちや時代背景などを調べておくことでテーマに対する理解が早くなる。また、輪郭が見えることでテーマへの関心が生じる利点もある。

生徒の精神的成長段階とともに一つのテーマに何時間をかければ、道徳的意識を高め心

の能力を伸ばすきっかけにすることができるかを十分に考える必要がある。それは「知」としてではなく「徳」として身につかなければならないからである。「徳」は小さなことでも続けることによって身についた実践する力を持つものことである。偉人から学んだことを実践に結びつけることを目標とする、それだけでもじっくりと取り組む必要があることは明白である。

2013年から2016年までの「偉人の生き方に学ぶ」授業をふり返る。

(ア) 2013年の「西郷隆盛」は事前準備ノートを作成し、それぞれが図書室等で調べる個人学習とした。また読み物としてのテキストを作成し、それらをもとに3時間の授業展開を試みた。

(イ) 2014年の「中江藤樹」は前年の反省の上に立ち、

①事前準備ノートをより充実させること

②個人学習ではなく、あらかじめグループとして総合学習の時間を利用して、藤樹の生い立ちや時代背景などを十分に調べ準備する方法に変えた。その上で内容が間延びせず、テーマに迫れるよう2時間に短縮する授業を試みた。

(ウ) 2016年は前2回の反省の上に立ち、事前準備の方法は総合学習の時間にグループで行なう形は残し、道徳の時間を3時間取った。さらに総合学習の時間2時間と道徳の時間1時間を道徳の授業に当て、1週間の中で一気に進めるという方法を試みた。それによって生徒がどのような反応を見せるか、週3時間という道徳の時間の取り方で、どこまで食いつかせることができるかという点に工夫を試みた。

(ア)にあるように2013年にも3時間にわたった授業を行なった。西郷隆盛という人物の知名度と魅力もあったと思われるが、感想やアンケートからある程度ねらいを達成することはできたと結論づけた。ただ、3週にわたったこともありやや間延びした嫌いも否めない。前週に行なったことをふり返る時間も取られるという時間的ロスも感じた。

そのような点から、今回、記憶の新しいうちに、あるいは生徒の心に残るものが新鮮なうちに一気に考え深めることで、心揺さぶるものがさらに深まることを期待して行なった。深まりがあるほど、本来のねらいである「人間としての憧れ」や「人間としての尊敬」が強く心を揺さぶる。その結果、より効果ある授業になると考えたことが理由の一つである。

④ グループ割りに関すること

2013年に始めた当初からグループ活動を中心に進めてきた。2014年には前述したとおり、事前準備の段階からグループとして活動させた。今回を含めた3回のグループ割りの仕方は以下のとおりである。

2013年・・・男女別グループ

2014年・・・男女別グループ

2016年・男女混合グループ

クラスの生徒数は2013年、14年とも30名前後であった。2016年は36名のクラスである。男女比はいずれも男子70%、女子30%である。

過去2回は男女別のグループ構成で行なった。道徳の授業だけではなく、ホームルームやその他の教科でもグループに分けて行なう機会が多いと思うが、どのように分けるかということも、活動の活発さや結果に違いが出ることは、多くの経験のあるところであろう。

「偉人」を扱う道徳の授業では、2013年、14年の授業後の感想はそれぞれの人物から学んだことが述べられていた。アンケートに「⑦この授業を受けて自分の考え方や行動を変えようと思いましたか」「⑧また偉人の生き方から学んでみたいと思いますか」という問いを置いた。それに対して男子はいずれも「とても思う」「まあまあ思う」が約90%前後を占めた。しかし、女子は⑦は約70%、⑧は約60%台であった。特に中江藤樹についての女子は、⑦の肯定的な答えが8名中7名であったが、⑧は3名という結果であった。

西郷については女子生徒の関心を引く材料が男子に比べて少なかったことは理解できた。それを踏まえて藤樹については「母との関わり」を中心に展開したが、西郷よりも低い数値として表れた。授業を受けた生徒は同じではないが、扱う内容だけの問題ではないことは明らかである。

男子の考え方、女子の考え方というものがあることを考慮して男女別にしてみたのであるが、その意味が本当にあったかどうかは断言しきれない。さらに積み重ねながら、単に数字の上だけではない効果を検証したいと考えた。今回のグループ割りはその点を踏まえて、男女が同じグループになり、その中でそれぞれの考え方をぶつけ合う、それはグループごとの発表の段階で聞く聞き方、捉え方と違ったものになる。言わば男女お互いの生の声をグループ内の活動の段階で聞くことになる。そこから発問に対しての考えが、すでにグループの中である程度醸成されることが考えられる。

グループは5～6名で女子が2名入る形で7グループの構成にした。そのうち2グループのリーダー（進行とまとめ）は女子である。グループ割りとリーダーは生徒をよく知る担任に依頼した。

グループ割りに一つつけ加えると、適正人数についてである。学校の場においても、企業などのプロジェクトチームなどにおいても、おおよそ5名という人数が適正と言われる。過去、さまざまな場でグループ活動を行ってきた。現在も短大のゼミや他教科の授業でグループ活動を行っているが、偶数であれ奇数であれ、人数が多くなるとグループの中で割れてしまうことだけは明らかである。よって多くて6名と考えている。

⑤ 教材とテーマについての考察

(ア) 教材としての「偉人伝」の意義と可能性

『中学校学習指導要領 特別の教科道徳』の目標として、『よく生きるための基盤となる

道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考え方を深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる』と掲げている。

この目標に則って『第2 内容』が明示されている。さまざまな教材はこの中に当たるものをテーマとして深め、実践的態度を養うよう学ぶためのものである。何をテーマにするかは、年間計画として作成されるのであるが、当然中学校は3年間を見通した中での年間計画が作られなければならない。学校の方針の範囲または関連のあるクラスの方針に沿った計画が作成されるであろうが、以前から述べているように、今現在、生徒たちが直面する問題に当たるものに応じて選択することもあり得る。特に生徒たちが『人間としての生き方についての考え方を深める』べき問題に直面した場合は、年間計画に沿ってというわけにはいかない場合もある。

一般に中学校では『C 主として集団や社会との関わりに関すること』の比率が高くなる。生徒たちが本当に考えたいと思っていることをテーマとするのが理想的と思う。また、それが求められるのであるが、「生徒たちが今考えるべきこと」もテーマとする必要がある。それが必ずしも生徒たちが「本当に考えたいと思っていること」とは重ならなくても、必要なものは必要として扱うべきである。

『道徳と心の教育』の『中学校の副読本の内容分析と指導方法の考察』で、岡山県立教育センターの市坂よし子氏は『生徒が学習に意欲的に取り組み、充実感をもち、道徳的価値の内面的な自覚を深めるために』

- (a)生徒の感性に訴え、豊かな感動を与える資料
- (b)人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられる資料
- (c)生や死の問題、人間としてより良く生きることを深く考えることができる資料
- (d)体験活動や日常活動などを振り返り道徳的価値の意義や大切さを考えることができる資料
- (e)多様で発展的な学習活動を可能にする資料

の5つの要件をふまえ、『新しい視点に立った心に響く資料を選定することが大切である』と述べている。

2015年度『星稜論苑』誌上で教材・テーマの扱いについて述べたが、市坂氏の指摘する点と重なる部分も多く、賛同するものである。「新しい視点に立つ」ということは、特別人と変わったことをするという意味ではなく、世の中の背景の変化の中で、現実をきちんと見極めることで「新しい視点に立」って教材・資料を選定し展開するということである。それが一見ありきたりに見える「偉人伝」でも、十分にそれに耐えることができる。だからこそ「偉人伝」であるとも言える。あたかも万葉集や徒然草が千年から数百年の時間の風雪に耐えて、現在にも通じるようなところに、「偉人伝」の中には生の人の生きざまとして、その時代時代の背景に耐え得るテーマを見出すことができる。また、同じ人物であっても、どこに焦点を当てるかによって、さまざまなテーマに変化し得る点も見逃せない。

過去のテーマについては、中学1,2年生の精神的成長の時期に合わせ、読み物としてもやや長めの自作のテキストを作成し、よりテーマに迫りやすいものになるようにしてきた。

2013年・・・西郷隆盛 「言行一致」の生き方

2014年・・・中江藤樹 「孝の心」を中心として

教育哲学者の森信三氏は、伝記を読む時期としてであるが、適当な時期として十二、三歳から十七、八歳ころと指摘している。いわゆる立志の時期に当たる。また、九州大学医学部名誉教授、井口潔氏は著書『生物学的視点からの教育の見直し』、あるいは『人間力を高める 脳の育て方鍛え方』の中で、同様に青年期に当たる十一歳から二十歳が人格を作り上げ、新しい知識を求める時期としている。また、『人間の生き方を教えるような書物に親しみ、いかに生きるべきかを考えるようになる』とも述べている。

両者が指摘されるように、西郷や藤樹の生きざまは、人間の強さだけではなく弱さやもろさを含めた、生の人間像として受け止められる教材とすることができる。そういう教材として生かすために、現在の生徒自身と重ねることを重視し、できる限り自分の普段の姿勢に引き寄せて考えるよう配慮することが大切である。

自作のテキストで注意すべき点として、前述した市坂氏の指摘することはもちろんであるが、その他に3つ挙げる。

- ① 事実関係が正確で具体的であること
- ② テーマに関わることにこだわり過ぎて、内容が偏ることなく客観的であること
- ③ 選択した人物を生徒が知らない場合、教師の興味と生徒の興味関心にズレが生じる可能性があること

この3点は特に留意すべきことで、教師の思いが空回りするとせっかくの教材を活かせないことが起こる。今回教材とした北里柴三郎を扱うにあたって以上の点ももちろんであるが、生徒自身の将来を見据えることと今現在の自分の足元を見つめることのバランスも重視した。

(イ) テーマの設定にあたって

柴三郎の生い立ちや功績、生き方などを通観すると、いくつかのテーマを設定できる。『学習指導要録 特別の教科道徳』にある『B 主として人との関わりに関すること』の『(6) 思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること』。『C 主として集団や社会との関わりに関すること』の『(13) 勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること』。また(16)『社会に尽くした先人・・・に尊敬の念を深め・・・』、(17)『新しい文化の創造に貢献するとともに日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に

努める』などの一部もテーマとなり得る。

平成25年7月、第45回日本道徳基礎教育学会研究大会が筑波大学附属小学校で行なわれた。小学3年生を対象とした公開授業を行なった後、研究協議に入った。資料は「ぼうや、生きていてくれよ」。ある消防士の物語であるが、同会の会長、新宮弘識氏の著によるものである。研究協議の終わりに新宮氏は、この資料をどういう思いで書いたのかを語られた。そのお話を聞いて、教師が資料・教材を扱う場合に著者の思いに迫ることも必要な要素の一つと感じた。さらに資料・教材の人物にどこまで共感できるか、そして資料の中に入り込み「徳」の構造と結びつけることは大切な一点と考える。表面的に読み物として読んだ場合、前述したようにいくつかのテーマを考えることはできる。しかし、著者の思いにも迫りながら人物の生き方と重ね合わせなければ、教材を真に活かすことはできない。それは生徒の心を揺さぶることもなく、一人の歴史に残った人間が生きた跡をなぞるだけになってしまうことになる。換言すれば、分かり切ったことを教師が投げ、生徒が期待通りの答えを投げ返すという、平板な授業になることを意味する。

（ウ）教材の選択の試みとテーマの設定

生徒が関心を持って授業に臨めることと教材やテーマは無関係ではない。近年の出来事と関連を持つものがあれば、それに越したことはないが、直接の関係はなくとも導入や展開の一部分で触れられると、より具体的な広がりを持たせることができる。

今回は2015年ノーベル生理学・医学賞で日本人の受賞者があったことは記憶に新しいこともあり、さらに受賞者の大村智氏が北里大学栄誉教授であったことから、北里柴三郎にもつながる。その点から過去に扱ったものとは違った導入で、生徒の興味を引けると考えた。

過去2回の教材は、テーマにより迫りやすくするために、「偉人伝」一作品から引用するだけでなく、それに関わる資料も合わせて自作のテキストを作成してきた。今回はあえて自分の手は加えず、市販の書籍で最も適当と思われるものを選択した。『日本の偉人の物語』（白駒妃登美著・致知出版社）である。

白駒氏がまだ執筆中にうかがったことであるが、この著書は中学1、2年生あたりの年代を対象とすることを意識して書かれたものであり、その点でも選択の要素をもっていると思われた。また、著者自身が「まえがき」で述べているが、『歴史上の出来事をたどりながら、それぞれの時代に生きた人々の思いを繙き、それに寄り添い、彼らが未来を生きる私たちにどんな思いを記したのか、その先人たちからのメッセージを受け取ること』という立場から書かれている。

『学習指導要録 特別の教科道徳』にある(16)の『社会に尽くした先人・・・に尊敬の念を深め・』る、また、柴三郎の功績や生き方の内容については、『(13)勤労の尊さや意義を理

解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること』を学び深めるに充分耐え得る作品であると判断した。北里柴三郎の記述は14ページにわたるが、前もって生徒が読むには決して負担にはならない。むしろ事前準備の一環として十分な内容といえる。

一般に学校で使われる資料でも、自作のテキストでもなく、あえて市販の単著を使っての授業を試みどこまで深く切り込めるか、「試み」というより一つの「挑戦」の思いで取り組んだ。

⑥ 「総合学習の時間」ノートによる事前学習の効果

2013年、14年に偉人を扱った授業を行なった時、いずれも「今後の課題」として残ったことがある。それは事前学習や授業用の書き込みノートを、どのような内容にするかということである。当然、扱う人物やテーマによって変わるが、その効果として、

- ① 人物の生い立ちや業績など、輪郭が見える。
- ② 各自が調べた部分が、グループ内、グループ同士の発表と合わさって、より立体的な人間像ができあがるのが期待できる。
- ③ グループ内での協力の上に発表のための協議・発見、さらに友情・尊重・自立などの道徳的資質が助長されることも期待される。
- ④ 各グループの発表によって立体化される段階で、一人の人間像をそれぞれの捉え方で自分と重ねる。そこから「人生のモデル」としてより具体化される。

最終的には④が目標である。今回の実施にあたって、過去の反省をもとに「総合学習の時間」ノートを作成した。以下、総合学習の時間用のノートの内容を記す。

「総合学習の時間」ノート

「総合学習の時間」の課題（青色の問いについて調べなさい）※青色は①②③

① 2015年ノーベル賞「自然科学分野」の日本人受賞者の名前を調べよう。
② その人はどういう立場の人ですか。
③ 北里柴三郎の生い立ちについて、幼少時に人格を作る基礎になったと思われることを調べてみましょう。
④ 自分の考えや行いが周りに理解されなかった経験がありますか。（具体的に述べる）
⑤ どうやって乗り越えましたか
⑥ 友だちが周りから理解されずにいる時、手をさしのべた経験がありますか。 （ア）どんなことで苦しんでいましたか。（具体的に） （イ）どうして助けてあげようと思いましたか。
【テキストP21】
柴三郎が日本に伝染病研究所を設立したいと考えたが、国が理解してくれなかった。
① その時、柴三郎に救いの手をさしのべたのは□□□□でした。
② 具体的にはどんなことをしてくれたのでしょうか。

③ どうしてそこまでして助けようとしたのでしょうか。
《柴三郎の功績》
《柴三郎の人柄》

3. 「学習指導案」の作成にあたっての視点

教育哲学者、森信三氏は「先哲に学ぶ態度」として次の三つを挙げている。

- ① 偉人の考えたこと、為した事柄を、現在の立場から、批判的にみる。
- ② その偉人の生きていた時代を考え、自分もその時代の一人になったつもりで、その偉人の思想や行動を、内側から考える。
- ③ もしその偉人が現代に生きていたとしたら、いったいどのような生き方をするであろうかと考える。

以上の中でも②の態度をもって取り組むことが、偉人と自分を最も結びつけやすく、北里柴三郎を通して「労働観」を考える上でも適切な視点と考えた。

4. 学習指導案・授業の展開と考察 【第1時】

① 学習指導案1 【第1時】

星稜中学校 第2学年 A組 道徳学習指導案1		
平成28年6月15日（水）第5校時 2A教室 【指導者 本田 実】		
展開の概要	（2年A組・36名）	
「偉人の生き方から学ぶ ～天命に生きる 北里柴三郎～」(1)		
授業の目標	北里柴三郎の人柄や生き方を通して、勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める意味を学ぶ。 また、社会に尽くした先人の根本にある「公の精神」「恩に報いる」生き方から、真の労働観を育む。	
本時の目標	①人生には人に理解されず、壁にぶつかることがある。自分の力だけではなく、誰かの助けがあって乗り越えられることが多いことに気づく。	
	②どういう人が助けたいと思われるか、そこにはその人の「志」があることに気づく。	
学習活動	主な発問と活動	指導・援助の留意点
1＜導入＞ 事前に ①②をまとめ やすいよう に、冊子とし て配布する	「総合の時間で調べたこと」 ①2015年ノーベル賞 （生理学・医学賞）の受賞者と簡 単な経歴を調べた内容を尋ねる。 ②大村智氏から北里大学、北里研 究所へさかのぼり、創設者北里 柴三郎に行きつく関係を知る。	総合の時間用の冊子は教師が作成 する。 テキストは、「偉人の生き方から学 ぶ～天命に生きる～ 北里柴三郎」 （白駒妃登美著・致知出版社）

学習活動	主な発問と活動	指導・援助の留意点
2<展開>	テキストの輪読	生徒が数行ずつ音読する
【発問1】	①自分の考えや行いが周りに理解されなかった経験がありますか。 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	
【発問2】	②北里柴三郎にも柴三郎にも同じように、自分の考えや行いが周りに理解されなかった体験が何度もありました。 どんなことがありましたか。 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	柴三郎が日本に伝染病研究所を設立したいと考えたが、国が理解してくれなかったことに重ねる。 P19『北里柴三郎のピンチを救った福沢諭吉』を中心に。
【発問3】	②その時、柴三郎に救いの手をさしのべたのは誰ですか。 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	
【発問4】	③その人は具体的にどんなことをしてくれたのでしょうか。 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	四つの内容にまとめる。
【発問5】	④その人は、どうしてそこまでして助けようとしたのでしょうか。 自分の考えをもとに、グループで話し合う 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	自己の問題として受け止め、内省する。
	⑤柴三郎の志と熱意に心を動かされました。 それはどんな「志」ですか。 生徒の答えを板書	・伝染病から日本国民を守りたい
3<まとめ>		助けようという気持ちはあっても、よほどのものがなければできない、という点への気づき。
【評価の観点】		
<p>人生には人に理解されず、壁にぶつかることがある。そのとき、自分の力だけではなく誰かの助けがあって乗り越えられることが多いことに気づけたか。</p> <p>柴三郎の「志」が個人的な利益ではなく、日本国民に向けられたものであったことに気づけたか。</p>		

② 授業の展開と考察 【第1時】

(ア) 導入

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
① 今日から3時間かけて、北里柴三郎の話をもとに、働くことの意味を考えてみたいと思います。	
② 総合学習の時間を使って調べたことを確認しましょう。 2015年ノーベル賞で、生理学・医学賞の日本人受賞者がいましたね。誰だったでしょう。	(ランダムにグループを選び、その中の生徒を指名) 生徒A: 大村 智さんです。
③ 大村 智先生は、どういう立場の人ですか。	生徒B: 北里大学の特別荣誉教授だと書かれていました。

今日から学ぶテキストは、北里柴三郎です。実は、北里大学のもとには、北里研究所とあって創設者は北里柴三郎なのです。そういうつながりがあるのですが、その北里柴三郎という人がどういう人だったのかをテキストを読んで、考えていきたいと思います。

テキストは14ページのものであるが、全員が読んできているので、本時のポイントになる部分を各グループ2名ずつ14名で輪読した。

輪読した部分は、「世界で初めて血清療法を確立し世界の北里となり、各国の大学等からの招聘があった。しかし、お金も名誉も選ばず、日本の医療体制の進歩のために伝染病研究所を設立することを国に求めたが、聞き入れられず失職状態になる。そこに救いの手がさしのべられる」という内容である。約5ページ分である。

(イ) 展開

「総合学習の時間」の課題ノートP1 【発問1】自分の考えや行いが周りに理解されなかった経験がありますか。 生徒の答えを板書	生徒指名=グループの代表 生徒C: 部活の後片付けに、チームメートを誘ったが断られた。道具や部室をきれいにしたかったが、気持ちが伝わらなかった。
相手はどう受け止めたのでしょうか。	生徒C: 必要ないと思った。

自分の気持ちを相手に伝えるのはむずかしいものです。伝えることと伝わることが同じとは限らないのですね。

<p>【発問2】柴三郎にも同じように、自分の考えや行いが周りに理解されなかった体験が何度もありました。 テキストのP19～21を見てみましょう。 どんなことがありましたか。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p> <p>国の予算の関係もあったかもしれませんが、希望が聞き入れられなかったのは、柴三郎の持っている危機感が理解されなかったのでしょうか。 さて、そのために柴三郎はどういう状態に追い込まれたのですか。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p>	<p>生徒指名=グループの代表</p> <p>生徒D：日本に伝染病の研究所を建てたいという希望が、政府に聞き入れられませんでした。</p> <p>生徒E：「世界の北里」が日本で失職状態になりました。</p>
<p>柴三郎が日本に伝染病研究所を設立したいと考えましたが、国が理解してくれませんでした。その上、内務省への復職も許されなかったのですね。 絶体絶命のピンチです。</p> <p>【発問3】その時、柴三郎に救いの手をさしのべた人がいました。課題ノートP5①の空欄にその人の名前を入れましょう。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p>	<p>(挙手による個人を指名)</p> <p>生徒F：福沢諭吉です。</p>
<p>【発問4】諭吉は具体的にどんなことをしてくれたのですか。</p> <p style="text-align: center;">生徒の答えを板書</p>	<p>(挙手による個人を指名)</p> <p>生徒G：研究所の場所を無償で提供してくれました。</p> <p>生徒H：私財を投じて、柴三郎のために伝染病研究所を建ててくれました。</p> <p>生徒I：研究所が手狭になった時、移転して拡大してくれました。</p> <p>生徒J：近隣住民の移転反対があった時、研究所の隣に、諭吉の息子の家を建てて安全をアピールしてくれました。</p>

考察

本時の目標は『①人生には人に理解されず、壁におつかることがある。自分の力だけではなく、誰かの助けがあって乗り越えられることが多いことに気づく。』『②どういう人が助けたいと思われるか、そこにはその人の「志」があることに気づく。』の2点である。

ここまでは、①に向かうための発問を行なった。この段階では発問に対して、事前準備の確認や、本文から答えを見つけ出す作業であり、『気づく』という深みにまで達していない。そこへ至るためには②へ進む過程が必要である。そういう意味で、過程の中で少しずつ気づいていけるように、当初の構成を修正しながら進めた部分もある。

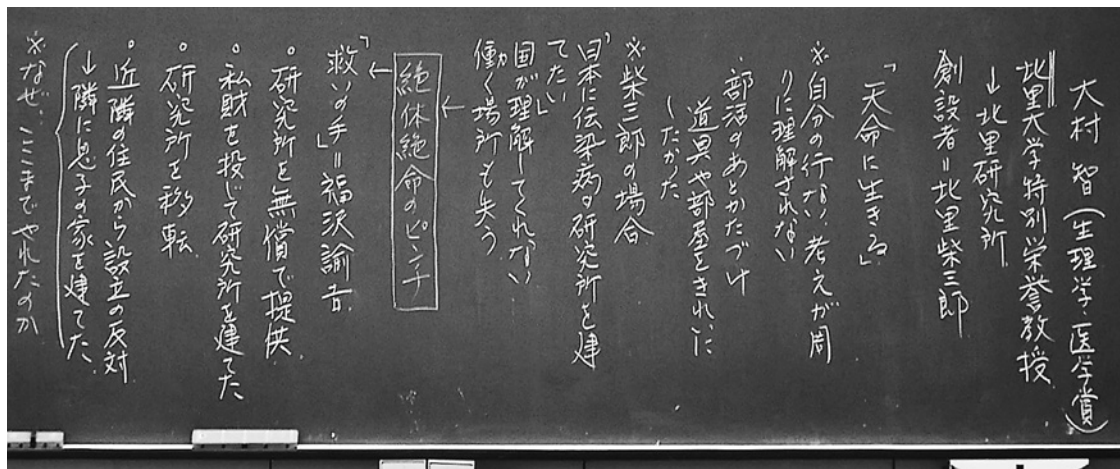
<p>【発問5】 諭吉はどうしてそこまでして、柴三郎を助けようとしたのでしょうか。</p> <p>代表生徒の答えを板書</p>	<p>生徒指名=グループの代表</p> <p>生徒H：柴三郎の志に胸を打たれ、熱意に心を動かされたから。</p>
--	--

「志」というキーワードが出たことで、補足の発問をした。

<p>【補足発問】 では、諭吉の心を動かすほどの、柴三郎の「志」とはどういうものだったのでしょうか。</p> <p>生徒の答えを板書</p>	<p>(挙手による個人を指名)</p> <p>生徒I：伝染病から日本国民を守りたい</p>
---	---

第1時間目では、北里柴三郎の挫折と福沢諭吉の救いの手。そしてその間に柴三郎の「志」があって結びついたものであることまで進めておきたかった。今回の試みとして、2時間連続ということだったので、まとめとしては、多くを語らず、柴三郎の「志」がこのあとのキーワードになることを告げて、次の時間への疑問や興味・関心を持って終わりをした。

板書



5. 学習指導案・授業の展開と考察 【第2時】

第2時は、第6限目。10分間の休憩の後、ただちに開始した。第5限目の最後であった柴三郎の「志」が、福沢諭吉が柴三郎を援助した理由であった点を確認した。この点について、なぜ「志」が諭吉の心を打ったのか、なぜ援助をする気持ちになったのかという疑問を持った生徒が、少なからずいると思われる。その疑問に丁寧に迫り、さらに今回のテーマである、「日本人の労働観」が隠されていることに気づく伏線を張りながら進めた。

① 学習指導案2 【第2時】

(ア) 学習指導案

星稜中学校 第2学年 A組 道徳学習指導案2		
平成28年6月15日(水) 第6校時 2A教室 【指導者 本田 実】		
展開の概要	(2年A組・36名)	
「偉人の生き方から学ぶ ～天命に生きる 北里柴三郎」(2)		
授業の目標	北里柴三郎の人柄や生き方を通して、勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める意味を学ぶ。また、社会に尽くした先人の根本にある「公の精神」「恩に報いる」生き方から、真の労働観を育む。	
本時の目標	柴三郎の人柄をもとに、なぜ、自分の手柄を弟子に譲ったり、報酬を受け取らなかったりする生き方ができたのか。その根本にあるものを考える。	
学習活動	主な発問と活動	指導・援助の留意点
1 <導入>	前時 福沢諭吉の柴三郎に対する行為と柴三郎の「志」を振り返る。	「志」を持っていた柴三郎は、大きな功績を残した点から入る。
2 <展開> 【発問3】	柴三郎の功績と人柄を、テキストからまとめてみましょう。 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	テキストをもとにグループで話し合い、ノートにまとめる
【発問4】	《功績》 《人柄》 《人柄》に見られるようなことがなぜできたのでしょうか。 柴三郎の生い立ち、【発問2】③で考えたこと、テキストをもとにグループで話し合い、ノートにまとめる 生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書	P19にも、作者は「なぜ、これほどまでに見事な生き方ができたのでしょうか」と疑問を持っています。 ・母貞から厳しいしつけを受けた ・親戚に預けられて、伯父から四書五経の手ほどきを受けた ・福沢諭吉から受けた恩に報いようとした。
3 <まとめ>	特に【発問2】③で考えたこと「福沢諭吉から受けた恩に報いようとした」ことを中心に図にする ⇒ 諭吉 ⇒ 柴三郎 ↓ ↓ 志賀潔 野口英世 ↓ ↓	【発問4】の答えはいくつか予測できるが、【発問2】③で考えた「福沢諭吉から受けた恩に報いようとした」に結びつく点が、全体の目標に終着することになる。
【評価の観点】		
柴三郎の生き方の根本に「恩に報いる」という考え方があったことに気づけたか。		

② 授業の展開と考察 【第2時】

(ア) 導入

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
<p>前の時間では福沢諭吉が、柴三郎に対して大きな援助をしていたことと、柴三郎には「志」があったことを学びました。</p> <p>「志」がどんな関係があるのかなど、疑問が残ったと思いますが、この時間はそこにつながる、柴三郎の功績や人柄をみてみたいと思います。</p>	

(イ) 展開

<p>【発問1】 テキストを参考に、柴三郎の功績にどんなことがあるか、まとめてみましょう。</p> <p>生徒指名（グループ別）</p> <p>生徒の答えを板書</p>	<p>生徒A：破傷風菌の培養</p> <p>生徒B：免疫抗体の発見</p> <p>生徒C：血清療法の実立</p> <p>生徒D：血清療法をジフテリアに応用第1回ノーベル生理学・医学賞にノミネートされた</p> <p>生徒E：ドイツ政府からプロフェッソル（大博士）の称号を受けた</p>
---	--

柴三郎の功績は、「総合学習」の時間を使った準備の段階で、ある程度調べられていたが、ここに挙げられたものだけでも大きく世界の医学界に貢献するものである。また、多くの人々の命を救うことにもつながる功績である。「世界の北里」と呼ばれる意味が明確になった。

「これほどの実績を積んだ人」という視点から補足発問をした。

<p>【補足発問】 これだけ大きな実績を持った人だったら、普通どんな態度になることが多いと思いますか。</p> <p>生徒指名（グループ別）</p> <p>生徒の答えを板書</p>	<p>生徒F：態度が大きくなると思います。</p> <p>生徒G：態度が偉そうになると思います。</p>
<p>全部の人がそうなるとは限りませんが、特別扱いされることに慣れてしまうことが多いようです。気がつかないうちに、そうなるのが人間なんですね。</p> <p>そういうことを含めて、みんなが調べた柴三郎の生い立ちや行為から、人柄がうかがえることを挙げてみましょう。</p>	

<p>【発問2】 柴三郎の生い立ちや行為から、人柄がうかがえることを挙げてみましょう。</p> <p>生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書</p>	<p>生徒H：弟子の志賀潔に赤痢菌の発見の手柄を譲りました。</p> <p>生徒I：I君と同じようなことですが、アメリカの調査団が来た時、通訳に野口英世を抜擢して世界への道を開くチャンスを与えました。</p>
<p>普通に考えれば、柴三郎は志賀直哉や野口英世の師に当たるわけですから、自分が彼らより前にいて当たり前ですね。そうであっても何もおかしいところはありません。しかし、指導や共同の研究をしたことより、弟子たちに世界へ飛び出すチャンスを与えているのですね。</p> <p>そのような弟子たちへの行為を見るだけでも、偉そうな様子は見えませんね。</p>	

上記のことを確認したことで、本時の目標に迫る土台ができた。

<p>【発問3】 「人柄」にみられるようなことについて、テキスト19ページで著者も『なぜ、これほどまでに見事な生き方ができたのでしょうか』と、疑問を投げかけています。</p> <p>なぜでしょう。</p> <p>生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書</p>	<p>生徒J：生徒H：幼いころから厳しくしつけられていたことが、柴三郎の人柄を作ったと思いました。</p>
<p>【発問3-1】 誰からどのようなしつけを受けたか、調べてありますか。</p>	<p>生徒J：母の貞は武家の生まれで、教育に甘えを許さない厳しい人だったそうです。それで柴三郎を親戚に預けて、伯父から人の生き方を教えられたそうです。</p> <p>そういうところが柴三郎の人柄を作ったと思います。</p>
<p>【発問3-2】 そのほかに理由を考えた人。</p>	<p>生徒K：福沢諭吉から受けた恩に報いようとしたのではないかと思います。</p>

考察

生徒Jの答えた内容は、「総合の時間」を使って調べたことをもとにしたものである。柴三郎が幼少時に叩き込まれた精神は、四書五経を中心とした人としての生き方である。九州大学医学部名誉教授の井口潔氏は『人間力を高める脳の育て方鍛え方』の中で、幼年期の教育について『幼年期の教育は青年期になって完結する』と述べている。生徒Jの答えは、後々の「恩」の心につながる部分であり、本時の目標に向かう過程の中で必要なものである。

それを踏まえて、「誰からどのようなしつけを受けたか」という点を具体的に尋ねた。偉人といわれる人たちの後ろには、必ずと言ってよいほど立派な母親の姿がある。ま

た、吉田松陰に代表されるように、伯父などの身内の厳しいしつけや学問がある。柴三郎についても例外ではなかったことを補足した。

さらに、第1時からのつながりへの気づきも重要なポイントである。その点から答えたのが生徒Kである。福沢諭吉から受けた恩は第1時間目でまとめた。私財を投じて研究所を無償で提供するなど、一般にはなかなかできないほどの大きな支援をした。確かに柴三郎は大きな恩を受けた。生徒J・生徒Kの答えから、『なぜ、これほどまでに見事な生き方ができたのか』の根本を考える本時の目標へ一歩進んだ。

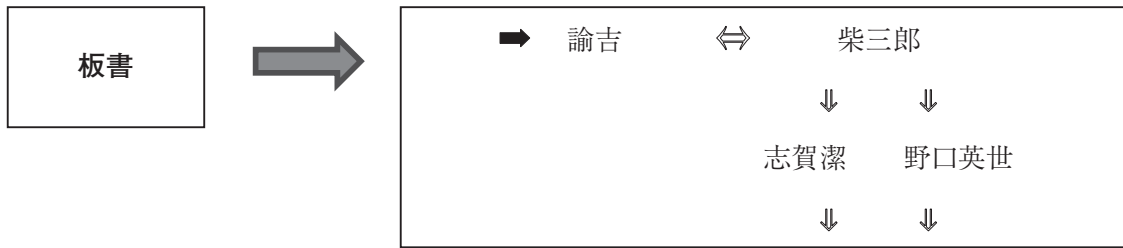
<p>【発問4】 今、「福沢諭吉から受けた恩に報いようとしたのではないか」という答えが出ました。 では、柴三郎はどのように諭吉の恩に報いたのでしょう。</p> <p>生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書</p>	<p>生徒L：福沢諭吉が作った慶応義塾に医学部を作りました。諭吉の夢を実現することで恩に報いようと思いました。</p> <p>生徒M：北里研究所の優れた教授たちを医学部に送りました。</p>
--	---

考察

生徒L・生徒Mの答えをもとに、この時間のまとめに入った。
前の時間では福沢諭吉が、柴三郎に対して大きな援助をしていたことと、柴三郎には「志」があったことを学んだ。2時間続けたことによって、柴三郎と諭吉、他の弟子とのつながり方や背景が、かなり明確に捉えられてきたのを感じた。そのせいかグループリーダーを中心とした活動も、予想以上に活発な意見交換がされていた。一人の生徒の発言を聴く姿勢は、第1時の記憶が新しく、生徒の関心が高まって授業の流れをスムーズにしていると考えられる。

さて、いよいよ柴三郎は援助を受けたことによって功績を上げただけではなく、「受けた恩に報いようとした」という点に注目できた。生徒Lが答えたように、諭吉が設立した慶應義塾に医学部を作るのは、諭吉の夢であった。そこへさかのぼって諭吉の最も喜ぶであろう形で恩を返したのである。さらに医学部を作るだけでなく、自分の研究所から志賀潔を始めとする名だたる教授たちを送り込む点に至っては、柴三郎の「誠実さ」がはっきりと表れている。

ほぼ全員の生徒たちはあとの感想文に、この点について感動の大きさを述べている。
生徒L・生徒Mの答えをもとに以下のようにまとめた。



生徒とのやり取りをしながら、上記のように順に板書した。

論吉から無償の援助を受けた柴三郎は生徒L・生徒Mが答えたような「恩返し」をした。これはしてもらったからしてあげるといふ、単なるお返しではない。この行為に北里柴三郎という人間性が表れていることに気づく必要がある。

そのために柴三郎が志賀潔や野口英世に何をしたかを振り返った。

【発問5】 柴三郎が志賀潔や野口英世に手柄を譲ったり、世界への道を開いてやったりしましたが、その時の柴三郎の心の態度を振り返ってみましょう。論吉が柴三郎に援助した時の気持ちと重ねて考えてみましょう。

生徒指名(グループ別)

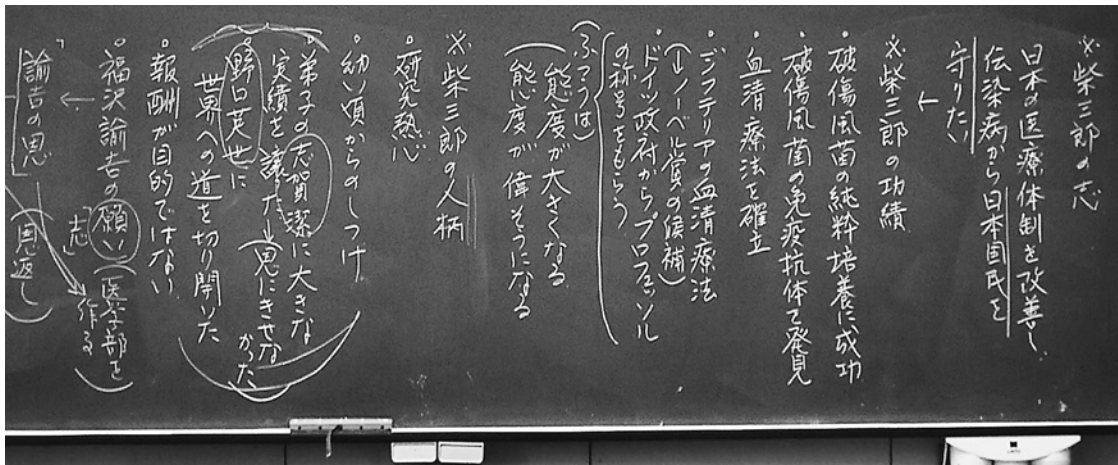
生徒の答えを板書

生徒N:「柴三郎の人柄」のところにあつたけど、福沢諭吉が柴三郎に無償でしたように、してやったという気持ちがなかったと思います。

柴三郎は諭吉からしてもらったことがとてもありがたく、うれしかったでしょうね。その気持ちのまま自分の弟子やあとから来る者のために、できることをしたのです。つまり柴三郎は受けた恩を返すと同時に、受けた恩を別の人に送る、「恩送り」をしたのです。

詳しくは話す時間はありませんが、諭吉自身もと長与専齋という人の恩を受けているのです。柴三郎の恩を受けた志賀潔や野口英世も他の人に、同じように「恩を送っ」ているのです。

板書



6. 学習指導案・授業の展開と考察 【第3時】

第3時は、第1時、2時を水曜日の第5,6限目に行い、その2日後にと、1週間のうちに一気に完成に行なった。2時間にわたり、柴三郎の生き方の根本に「恩に報いる」という考え方があったことまで掘り下げてきた。

最終時に前の2時間を土台として丁寧に迫り、さらに授業の目標である「公の精神」「恩に生きる」生き方から「真の労働観」に気づき、育くむ時間となること。また今後の生活の中に活かせるものを見出し実践につなぐきっかけとなる時間となることを願って行なった。

(ア) 学習指導案

星稜中学校 第2学年 A組 道徳学習指導案 3		
平成28年6月17日（金） 第4校時 2A教室 【指導者 本田 実】		
展開の概要	(2年A組・28名)	
授業の目標	北里柴三郎の人柄や生き方を通して、勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める意味を学ぶ。また、社会に尽くした先人の根本にある「公の精神」「恩に報いる」生き方から、真の「労働観」を育む。	
本時の目標	柴三郎の生き方の根本に「恩に報いる」という考え方があったことから、「働く」ということの本当の意味を考える。 日本人の「労働観」に触れる。	
学習活動	主な発問と活動	指導・援助の留意点
1 <導入>	前時 柴三郎の生き方の根本に「恩に報いる」という考え方があったことを、ふり返る。	「福沢諭吉から受けた恩に報いようとした」ことを中心にした図を確認する
2 <展開> 【発問5】	本当の意味の「働く」ということは、どういうことだと思いますか。 北里柴三郎や福沢諭吉の姿から考えてみましょう。	「働く」ことは、ある意味では相手との契約。 契約は、言い換えれば、「自分の時間、行為をお金に換えること」
	自分の考えをもとにグループで話し合う <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">生徒指名(グループ別)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">生徒の答えを板書</div> → さらに深める	
【発問6】	福沢諭吉や北里柴三郎から見た「仕事・働く」は、どのような意味を感じますか。 ・働く＝自分や人のため ・働くを（親、先生、友達から頼まれたことを実行する）に置き換えて考える。	自分の時間や行為を、人の役に立つことに使う。「恩」を送る生き方

<p>【発問7】</p>	<p>その場合の報酬は何でしょう。 自分の考えをもとにグループで話し合う</p> <p>意見討論 生徒の答えを板書</p>	<p>*生徒の答えを板書 人から「ありがとう」と言われる幸せ感</p>
<p>3 ＜まとめ＞</p>	<p>全体の意見を集約する 指導者のまとめ</p>	
<p>【評価の観点】</p>		
<p>北里柴三郎ら先人の生き方を通して、勤労の尊さや意義を理解したか。 日本人の「労働観」に触れ、今後の生活の中に活かせるものを見いだせたか。</p>		

② 授業の展開と考察 【第3時】

(ア) 導入

学習活動（教師）	学習活動（生徒）
<p>前の時間では柴三郎の人柄と功績を踏まえ、『なぜこれほどまでに見事な生き方ができたのでしょうか』という疑問に対して、「恩に報いる」という生き方があったことを学びました。</p>	

(イ) 展開

<p>柴三郎は立派な功績を残しましたが、それは研究という仕事をした、働いたことの結果です。</p> <p>【発問1】「仕事・働く」ということとはどういうことだと思いますか。 「仕事・働く」ことには、どんな意味があると思いますか。 何のために働くのでしょうか。</p> <p>生徒指名(グループ別) 生徒の答えを板書</p>	<p>生徒A：国や家族のためだと思います。 生徒B：自分の生活のためだと思います。</p>
---	---

な気持ちになれる」ことが報酬だと答えた。Bの「達成感」は自分のためと限定したことに対しての答えである。D、Eはそこから外へ向けて発展させた答えである。

生徒の考えは、他者の考えをもとに広がりや深みが増していくところに、授業としてのおもしろみがある。生徒たちが積極的に取り組もうとするところにそのような発展が必ずある。他のグループと違った答えを、あるいはよりよい答えを出そうという気持ちが働くことがあるが、そこに発展性がみられることが大切である。世にいう「耳ざわりのよい言葉」で飾られた表現は、抽象的であったり問いの方向を誤ることもあるので、授業者として注意したいところである。

【発問3】 までの流れから、教師が「働く」ことの意味を以下のようにまとめた。

「仕事をする・働く」ことは、ふつう雇う側の人が出て、その人とここで働きますと契約することです。そこで報酬の一つとしてお金をもらうことになります。言い換えると自分の人生のある時間と行為をお金に換えることですね。欧米では100%、そういう考え方で働いていますし、現代の日本でもそういう考え方をする人は多いでしょう。

でも、「仕事をする・働く」ことには別の報酬もあることに気づきました。その点からもう少し深めてみましょう。

【発問4】 北里柴三郎や福沢諭吉の「仕事・働く」はどのようなことでしたか。

生徒指名(グループ別)

生徒の答えを板書

生徒F：柴三郎は日本の国民を伝染病から守りたいという気持ちで研究をしました。

生徒G：福沢諭吉は慶應義塾を作りました。そこで医学部を作れなかったため、柴三郎にたくさんの援助をしました。

【発問5】 二人の行為をさっきの「働く(A)」「働く(B)」に当てはめて考えると、どちらになるでしょう。

生徒H：Bの方だと思います。

【発問6】 B君は自分がした仕事の達成感。D君は人の役に立ったことへの喜び、E君は幸せな気持ちになれることだと言いましたね。どの気持ちが一番強かったと思いますか。

生徒I：人の役に立てたことの喜びが一番あったと思いますが、達成感もあったと思います。

考察

【発問1】 ～ **【発問3】** まで「仕事をするということ・働くということ」が何のためであるかを中心に考えてみた。人は生きるために働くのであり、仕事をすることで報酬を得ることは当然のことである。しかし、生きるため、食べていくためだけに働くというのは道徳的価値を見いだせない。働く姿勢、どんな心を持って働くのかというところに「勤労、自律、自立、奉仕、信頼、尊敬、感謝、公正」などの「徳」がある。そのことへの気

づきの段階として【発問4】～【発問6】を置いた。

柴三郎だけではなく、福沢諭吉も合わせて尋ねたことに、生徒Iは「人の役に立てたことの喜びが一番あった」と答えた。おそらく他の生徒に尋ねてもこの答えははずれなかったと思われる。そこに柴三郎個人として、諭吉個人としての「達成感」もあったであろうことも推測している。本当にやれるところまでやりきったと言い切れる「達成感」まであったかは、そうとは言い切れないものが残るとは思う。しかし、柴三郎の行為は人々にとって立派な功績であることを思えば、「達成感」に近いものも否定できない。

柴三郎や諭吉の「仕事・働く」は、「困っている人や自分以外の人の役に立つため」が目的であり、人の役に立てたことが喜びであり、そのこと自体が「報酬」であることへの気づきにつながった。また、この気づきが第2時の「恩を送る」行為の意味をさらに深く理解することにつながるのである。

以上のことを踏まえて全体のまとめへと向かう。

【発問7】 職業や仕事を英語で何といいま すか。	生徒J：ビジネスです。
-----------------------------	-------------

職業や仕事を英語ではビジネス=businessと いいますね。 言葉には日本語にも英語にもも とになる言葉があります。それを 言葉の源、語源といいますが、 businessの語源はbusyです。
--

【発問8】 busyの意味を知っています ね。	生徒J：「忙しい」です。
----------------------------	--------------

<p>busyは忙しいという意味ですね。フランス語で仕事のことを「トラバユ」という そうです。この語源は中世のラテン語で「トリバリアーレ」というそうです。</p> <p>どういう意味かという「拷問する」だそうです。西洋では仕事をするのは拷問に 等しいものと考えられていたのです。もちろん、日本と歴史の成り立ちが違いますから そういう中での捉え方だったのです。</p> <p>ところが、「はたらく」という日本語は「はた（傍ら）」の人を「らく（楽）」にする、 ということがもともとなっていて言われています。</p> <p>つまり、「自分の時間や行為を人の役に立つことに使う」「人が楽になるように使う」 ことなのです。それは拷問ではなく思いやりの心です。</p> <p>日本と他の国、特に欧米とでは『労働観』が違うのです。「はたらく」ということ に対しての考え方が根っこから違うのです。</p> <p>《ここから図式化して板書》</p> <p>別の言い方をすると、物づくりでも同じことが言えます。</p> <p>ものは作られてから時間が経つと価値の下がるものがあります。逆に長い時間が経つ とともに価値の上がるものもあります。価値の下がるものは何の役にも立たないもの です。</p> <p>それはガラクタになります。</p>

【発問9】では時間の経過とともに価値の上がるものを何というか。 生徒K：骨董品と呼ばれます。

「ガラクタ」と「骨董品」の差は、「見えないところにどれだけ心を尽くしたか」で決まるのです。

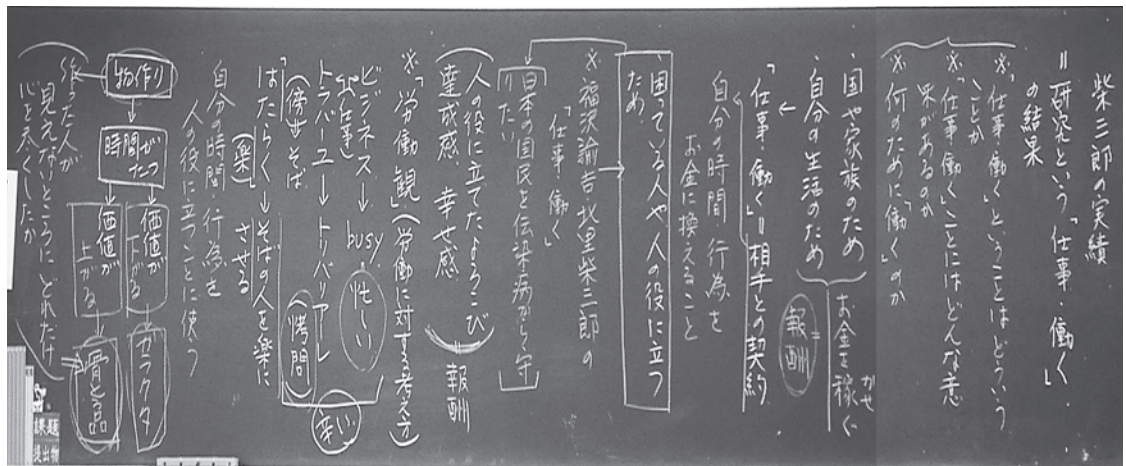
さっき「働く」を、「親、先生、友だちから頼まれたことを実行する」に置き換えると分かりやすいと言いましたが、「頼まれたことに誠意を込めて実行する」。
たとえば、掃除にしてもさらさらとゴミやほこりを集めて取るのと、教室の隅のほこりまで丁寧に掃き出すのとでは、掃除をする人の気持ちの現れ方が違うことが分かりますね。
さらに、先輩たちがそんなふう教室を使ってきたとしたら、次に使う後輩のためにもなっていると思います。それは先輩から受けた目に見えない「心」です。
それを感じたら、自分たちは次にこの教室を使う後輩たちに、その「心」をつないでいこうと思いませんか。

福沢諭吉が先人から受けた恩を北里柴三郎に送り、柴三郎は弟子の志賀潔や野口英世に送ると、「恩を送る」ことが「働く」中に込められていたのです。



生活するため、家族を養うために働くことはもちろん大切です。
しかし、それだけでは「仕事のやりがい」「世のため人のため」ということが抜け落ちてしまいます。
「働く喜び」はそれを抜いては味わうことはできないのではないかと思うのですが、みんなはどう考えますか。
それでは、これで私の授業を終わります。感想文はあとで担任の先生に提出してください。

板書



後日提出された感想文から、担任が選んだものを以下に全文掲載する。

自分は本田先生にさせていただいた授業を通して、日本は素晴らしい国だと強く感じました。「恩がぐるぐる回っていく国・日本」。このような温かい国は世界を回ってもほとんどないと思います。北里柴三郎の生き様がまさにそのお手本だったのだと思います。自分はこの授業を受けるまでは、北里柴三郎という人のことは全く知りませんでした。授業を受けて柴三郎の生き方に心ひかれました。亡くなったあとに後世にメッセージを伝えられる、それが偉人なのだと思います。柴三郎は本当に研究熱心なのだなと思いました。自分の部屋から研究室までの道しか知らない。「日本のために」という気持ちで研究していたのだと思いますが、その気持ちだけで、毎日地道な研究を続けるのは並たいていのことではありません。自分も「誰かのために」という気持ちで行動できるよう心がけていきます。個人に対しての気持ちでも時々意識が薄れてしまうことが、自分にはあります。しかし柴三郎は国に対しての気持ち、個人と国とは重みが大きく違うけれど、その気持ちを絶やさずにいられたのは本当にすごいと思います。その努力の結果が、ノーベル賞の候補者、プロフェッソルの称号というものになったのだと思います。

日本で失職状態になったり、反対の声が上がるなど、数々のピンチが訪れましたが、「国のために」、この志を持ち続けたから福沢諭吉という恩人に会うことができたのだと思います。

「見ている人は必ず見ている」。このメッセージが心に届きました。諭吉が柴三郎に送った恩を柴三郎が返し、またそれだけでなく野口英世や志賀潔にも恩を送る。その二人が柴三郎に恩を返し、また別の人へ恩を送る。このように恩がぐるぐる回っていくことは素晴らしいと思います。「天命によって運ばれる」、この言葉が本当に心に残りました。恩を送っている人が遠くに運ばれる「大切な人を笑顔にしよう、その人の恩に報いよう」、この気持ちがあれば人の能力は磨かれる。結局は人のために力を尽くした人が周りから尽くされるのだと思います。このような素晴らしい国は日本しかないと思います。もっと恩が色々な人に回っていけば、日本中が笑顔の絶えない幸せな素晴らしい国になると思います。柴三郎の生き方に感動したし、このような人が日本にいたという誇らしい気持ちになりました。

柴三郎の人生からの教訓は自分達が守り、つないでいかなければいけないと思いました。日本が日本であるために、日本人だということに誇りを持って生きたいです。「大切な人を笑顔にしよう、その人の恩に報いよう」、自らこの気持ちを持ち、またそう思われる人間になっていきたいです。

(H・T 男子)

7. 考察とまとめ

(ア) 感想の全体的な共通項

今回は授業の効果や生徒の反応をどのように捉えるかについて、過去のようなアンケートを行わなかった。感想文から生徒がどのように感じ、どのようなことを考えたのかを具体的にまとめることにした。書かれている内容についてどこに触れ、どのように考えたか

を、授業者が項目に分けていくという評価の仕方を試みた。結果として、上記のH・T君の感想は生徒たちの思いを代表した内容であることが感じられた。柴三郎に対して何らかの点から尊敬の気持ちを述べていた。以下にまとめたとおりである。

- ①北里柴三郎の「人のために」を根本に置いた「働くことの意味（労働観）」に感動した
- ②柴三郎の恩を送る生き方や人柄に感動した
- ③柴三郎の志を貫く生き方に憧れる。

大半の生徒が触れた代表的なものがこの三つである。もちろん、それだけを取り上げているのではなく、さまざまな視点の感想の中で触れている。

特に①は「日本国民を伝染病から守るため」「自分の人生という時間を人の役に立つことに使う」「報酬は人の役に立てた喜び」などを挙げてその感動を述べている。

また、②③については「すばらしい功績をあげながら、自分の志を忘れない謙虚な姿勢を持っていた」「自分の手柄を志賀潔らに譲り、弟子たちを育てることを考えていた」「研究に没頭する姿、やりぬく一生懸命さ」「国から理解されなくても最後までやり通した」などを挙げている。いずれについても事実を羅列しているのではなく、「人からされてうれしかったことをそのまま人に返すことを見習っていこう」「人としてのお手本だと思う」などの言葉とともに述べられている。また、父親が消防士という生徒は、『誰かを助ける仕事をするというのは、自分のお父さんも同じだと思う。お父さんも柴三郎のようにやってほしい』という感想を書いている。自分の親に重ねたほほえましさを感ずると同時に、父親の仕事の重さを感じ取っている点に注目すべきであろう。さらに柴三郎の努力に対して尊敬するだけでなく、ある生徒は「自分の才能や能力は、自分以外の誰かに役に立つために与えられたもの」と捉えている。

(イ) ①②③を深めた感想

以上挙げた「人柄」につながることであるが、「人のために尽くした人は、周りから尽くしてもらえないのではないか」という感想を持った生徒が6名いた。さらに関連して「自分がイメージしていた偉人の人間像が違っていった」と書いた生徒は、幼い頃からのしつけに着目している。この点に触れた生徒が3名いたが、その内容は「幼い頃のしつけは、人生をよりよく生きるための基礎になる」というものである。授業の中では、このことが柴三郎の人間を作ったというほど大きく扱ってはいない。導入として触れた程度である。しかし、柴三郎がどうしてこのような人間になったのかを考える過程で、自分たちが調べたことにさかのぼって考えるほど、重要な問題として捉えたのである。総合学習の時間での準備がこのような形で生かされる一つの例といえることができる。

授業者の想定以上の反応が一つあった。生徒の約半数が福沢諭吉に対して、柴三郎と同等かそれ以上に敬意を表している点である。内容から見れば確かに諭吉の力添えがあつての柴三郎の功績もあるが、大半は柴三郎の海外での功績と諭吉の力添え以前の功績が紹介されている。にも関わらず、半数の生徒はたった一つ紹介された、窮地に陥った柴三郎に

救いの手をさしのべた諭吉を絶賛している。これは「人のために尽くした人は、周りから尽くしてもらえるのではないか」という感想を持った生徒と同じものを感じているのではないか。表現は違うが、「どういう人を偉人というか」を考えた生徒が5名いた。「見えないう所でどれだけ心を尽くしたか、どれだけ努力をしたかが大切で、それができたから骨董品のように歴史に名前を残した」と書いている。同じ視点で柴三郎と諭吉を捉えているところは、テーマに食いついてきた表れと言える。

「偉人の生き方に学ぶ」道徳の授業を行なって、過去のアンケートでどの程度興味関心をもって臨んでくれたかをみてきたが、『④グループ割りに関すること』でも述べたように、女子生徒の反応が男子生徒に比べて低かった。また、感想文も西郷や藤樹について尊敬できる部分や感動した部分を挙げてはいたが、今回大きく違いが見られた。それは「北里柴三郎のように生きたい」とはっきりと言い切る感想が増えたことである。17名の生徒がそのように書いている。また、憧れの対象として書いているものを含めると26名になる。

（ウ）複数時間による授業実践

総合学習の時間を利用して事前準備をすることで、柴三郎の人物像の輪郭が見えてくる。「人柄」に触れた中で、幼い頃のしつけがあったことなどがよく調べられていた。単なる準備に終わらず、「なぜ福沢諭吉に恩を返し、志賀潔や野口英世に恩を送る生き方ができたのか」にしっかりと結びついている。自分たちで調べたからこそ記憶に残り、授業に結びつくのである。2013年に西郷を扱った時にはその一部を資料として生徒に渡したが、明らかに展開やまとめに違いが見られた。人物研究というには時間的に少なく内容的にも不十分であるが、授業を行なう上ではかなり有効な準備ができることが分かった。

また、道徳の授業は一見遠回りのように思われる内容でも、そこに触れることでより広い視野と思考によって、テーマに深く食いつくことができる。今回の授業でいえば、福沢諭吉の夢に関することや柴三郎の功績から人柄への流れなど、省略して短縮できる部分もあったが、あえて構成の中に入れることで、恩返し・恩送りから労働観へのつながりが具体的に結びついたといえる。

（エ）短期間に複数時間を行なう実践

短期間に複数時間を行なう方法でのポイントは、一つに2時間続きの時間を飽きさせることなくつなげるかにあった。そのために第1時間目の区切りが生徒の次への興味を引くところで終わることに配慮した。

柴三郎に人生のピンチが襲い、それを乗り越える力を与える諭吉の登場。何が諭吉の心を動かしたのかを区切りとした。換言すると、柴三郎の志がなぜ援助する気持ちにつながったのかという疑問を残して、2時間目につなぐ構成にした。

2時間目の始まりの様子は、明らかにその答えに迫ろうとするものがあった。第1時

間目との間隔が10分であったことで、気持ちが切れずにいる良い状態を保てた。この時間はすぐにその答えに向かわず、いわば変化球を使いながら最終的に恩送りに結びつけた。「恩返し」という言葉は聞き慣れているが、「恩送り」という言葉は生徒たちにとって新鮮な感触を与えた。同時に柴三郎の生き方の根っこに「恩に報いる」ことがあり、第1時間目の論吉こ行為と重なる理解まで進んだところを区切りとした。

最後の時間は柴三郎のこれまでの生き方を踏まえて「仕事・働く」ことを考える予告をすることで興味関心をつなぎとめるようにした。

このように1時間をどういう場面で終えて次につなぐかは、連続ドラマのように次の展開への期待や関心を持つようにすることが大切である。その上で短期間で行なうことで、記憶が新しいうちに、あるいは関心の火が消えないうちに次の展開に入ることから授業の流れをスムーズにする効果があった。これはむしろ間延びを防ぎ、理解を深め道徳的価値を感得するという効果がある。

(オ) 教材とテーマについて

教材の扱いの試みとして、これまでのようにいくつかの資料をつなぎ、一つの読み物として作成したものではなく、単一の読み物を採用した。そこに著者の意図もくみ取りながら進めることで、テーマに迫りやすかった。もちろん著者の意図に共感するものがなければ採用しない。教材の選択の仕方として、市販の書籍で十分に道徳の授業に耐え得るものがあることが立証された。もちろん通常の伝記もその中に入るが、内容のまとまりと長さも考慮の対象となる。本来の伝記は内容は充分であるが、長さとして適度なものにするために以前まで作成していたテキストのように一部を切り取る必要が出てくる。その点からも『日本の偉人の物語』は授業の教材として適当なものであった。さらに根拠をまとめると

- ①対象を中学生とした読み物であることが明確である。
- ②生徒の感性に訴え、豊かな感動を与える内容である。
- ③生きる喜びや勇気を与えられる内容である。
- ④人間としてより良く生きることの意味などを深く考えることができる。
- ⑤多様で発展的な学習活動が可能である

ことが挙げられる。

以上の点から今回の試みに挙げたことが、道徳の授業として実践可能であり、前2回と比較して、より充実し道徳的に効果的であったことが認められた。

8. 今後の課題

「まとめ」の最後に述べた結果がどのような理由によるものかをより明確な根拠を示したい。

(a)試みの①「複数時間の使い方」で、週内で成立させる方法が効果的だったか。

- (b)グループ割りは男女混合の方が効果があるか。
- (c)人物の選定とテーマの設定を、中学生の精神的成長に合わせたものとしてさらに掘り起こす。
- (d)テキストを市販のものを採用したが、再度実践することで根拠となり得るかを考察する。
- (e)アンケートの内容を再考し、数字で目に見える形にすることも必要であること。
- 来年度、総合学習の時間と連結する道徳の時間を、より効果的にするための試みを工夫し、さらに洗練された指導案、教材作りに挑戦する予定である。

《参考文献》

- 文部科学省中学校学習指導要領解説「道徳編」 (文部科学省) (2012年四版)
- 文部科学省中学校学習指導要領解説「特別の教科道徳編」 (文部科学省) (2015年7月)
- 文部科学省道徳用読み物資料 (中学校) (文部科学省) (2012年)
- 私たちの道徳 中学校 (文部科学省) (2016年)
- 子どもの心に光を灯す 日本の偉人の物語
- 白駒 妃登美著 (致知出版社) (2015年第1刷)
- 道徳と心の教育 山崎 英則・西村 正登編著 (ミネルヴァ書房) (2008年第5刷)
- 新学習指導要領の展開 柴原 弘志編著 (明治図書) (2016年初版第1刷)
- 新道徳教育の研究 長田 三男・橋本 太郎編著 (酒井書店) (2006年初版第5刷)
- 教師教育テキストシリーズ 道徳教育 井ノ口淳三 編 (学文社) (2012年第1版第3刷)
- これだけは知っておきたい道徳授業の基礎・基本 渡邊 弘著 (川島書店) (2012年 第1刷)
- 道徳教育論集第12号「道徳の時間にしなければならないこと、しなくてもよいこと」 服部 敬一著 (日本道徳基礎教育学会 第243号) (2013年5月)
- 道徳教育研究第244号 (日本道徳基礎教育学会) (2015年5月)
- 道徳教育研究第251号 (日本道徳基礎教育学会) (2015年7月)
- 道徳教育研究第252号 (日本道徳基礎教育学会) (2016年1月)
- 道徳教育研究第254号 (日本道徳基礎教育学会) (2016年7月)
- 道徳教育研究第245号 (日本道徳基礎教育学会) (2016年9月)
- 道徳教育の研究 教師養成研究会 (学芸図書株式会社) (2008年新訂修正7刷)
- 一生の羅針盤 森 信三著 (不尽叢書刊行会) (2000年初版)
- 修身教授録 森 信三著 (致知出版社) (1998年第16刷)
- ヒトの教育 井口 潔編著 (小学館) (2006年第1版)
- 人類が向かうべき進化の方向は「無の境地」だった! (ヒトの教育の会) (2014年初版)
- 生物学的視点からの教育の見直し 井口 潔著 (ヒトの教育の会) (2013年第4版)
- 人間力を高める脳の育て方鍛え方 井口 潔著 (育鵬社) (2016年初版第1刷)
- 内村鑑三の『代表的日本人』を読む 岬 龍一郎著 (致知出版社) (2001年第1刷)

- 道徳力 丸山 敏秋緒 (風雲舎) (1999年第2刷)
なぜ道徳は必要なのか 岩田 啓成緒 (モラロジー研究所) (2006年第2刷)
あなたが道徳授業を変える 櫻井 宏尚・服部 敬一編著 (学芸みらい社) (2013年初版)
中学生の道徳 かけがいのないきみだから2年 (学研) (2015年 平成27年度版)
中学道徳 あすをひらく1・2・3 (東京書籍) (2014年)